エイズ教育と性倫理

李　文昇

(1) はじめに

エイズ患者がはじめてアメリカで報告されてから12年が経過している。感染者は世界中の広範囲にわたり激増の一途を呈している。特に最近では男性よりも女性の感染者の増加が目だってきている。当初、アメリカでは男性同性愛者や麻薬常習者の感染者が9割を占めていたが、今日では女性の感染者の増加が拡大している。世界的にみても女性の感染者は約50%を占め、母子感染の拡大は日を追って増し、人類の今後の生存に暗い影を落としている。この現代の黒死病ともいうべきエイズは私達人類に多くの課題を提示している。それは、この疾患が性行為感染症（STD と略す）に位置付けられていることから、現代人の性行動と性倫理が問われているのである。例えば、先進国アメリカではエイズ以外の STD による死者が毎年1万人にのぼると報告されている。そのほとんどが STDに感染した母親から生まれた幼い子供達であるという。そして、これらの STD 感染者の数は1200万人、感染者を年齢層でみると約67%が性行動の活発な25才以下の青年である[1)](表1)。また、国際化の進む現在、日本においても感染者は、数の上では目だたないが、10代の青少年を中心に増加の傾向を示している。したがって、これらエイズを含めた STD 流行の増加を示す現在ほど青少年期の性倫理と性教育の重要性が叫ばれる時代はないと考えられる。

本稿はエイズ教育と性倫理と題して展開するわけであるが、その内容はまず第一に、エイズ流行の進行にともない、今後より一層、重要視されるエイズ教

表1　アメリカにおける性行為感染症の感染者数（1992年）

疾患名	感染者数
クラミジア	400万人
トリコモナス	300万人
りん病	110万人
ヒトパピローマ	50万人～100万人
性器ヘルペス	20万人～50万人
B型肝炎	10万人～20万人
梅毒	12万人

HIV 感染症以外のものを示した

育の課題について、正しい知識の必要性と患者に対する偏見差別の回避に焦点をあてて述べる。第二に、この疾病の原因である無秩序な性行動に対する反省から性教育の重要性が叫ばれているが、その現状について欧米と日本を紹介する。第三に、初期のエイズ流行を許してしまった欧米の性倫理の背景となるキリスト教の性倫理観とその諸問題について述べる。そして最後に、性倫理観の基盤となる人間の「性」の捉え方について著者なりの考察を付け加え論じたい。

（2）エイズ教育の課題

世界中に広がりつつあるヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症は男性から女性へ、女性から子供へと拡大している。この現状は特に近年、第三世界で顕著である。世界保健機構（WHO）の予測によるとエイズ患者発生以来、累計で約1400万人とも推定されている。さらに今後、2001年には4000万人に増加し、その9割が第三世界に集中するという[2]。このような現状に対して私達人類は早急な対策を立てる必要性に迫られている。

この感染症は現在のところ治療薬もなく「教育こそがワクチンである」といわれている。すなわち、現時点における唯一の予防法は感染予防教育を徹底するしかないと考えられる。エイズ対策は各国によって大きな相違を認めている。例えば、旧ソ連、中国等の社会主義諸国やインド等の南アジア諸国は、エイズ

を急性伝染病と同一に扱い、患者感染者に対して人権を無視した厳しい処置をとっている[3]。一方、エイズ先進国といわれる欧米の対策は、幸いなことに人権を重視し患者に対して柔軟なものになっている。

このような欧米の対応は WHO の指導に基づきエイズや HIV 感染症の性質を充分に熟慮してとられている。その基本的な考え方は感染予防と人権擁護の両立を柱としている[4]。したがって、エイズ教育の目的は第一に、エイズ、HIV 感染症についての正しい知識を普及することであり、第二にエイズを予防する知恵や行動、態度を育てること、第三に患者、感染者に対する偏見差別をなくすことを骨子としている。この章は、特に重要性が説かれているエイズを正しく理解することと患者や感染者に対する偏見差別の回避について整理し述べることにする。

1）エイズを正しく理解すること

エイズ感染予防に対する教育で最も大切なことは、この疾病の性質を正しく理解することであろう。しかし、エイズに対する認識は各文化圏や個人で異なっている。この認識の相違は、目に見えない病原ウイルスに対する恐怖心や体の表面に出てくる病像に対する嫌悪感、さらには死に至る病としてのイメージによって大きく影響を受けているようである。このような疾病に対する誤認識は、科学が未発達の時代においても根強くはびこっていたわけである。例えば、ライ病（ハンセン氏病）であるが、この伝染病は現在では治療可能で、感染力も極めて弱いことが知られている。しかし、この疾病の病像は、皮膚や末梢神経が犯され、手足や顔に醜く後遺症を残すという特徴から、多くの人々に忌み嫌われている。さらにごく身近な親子等に感染するということから特定の限られた家族にのみおこるという宗教的意味が付加され天刑病とさえいわれたのである[5]。この病を患った患者はライ病院に強制的に隔離され、猛烈な差別の対象とされてきたわけである。一般に疾病に対する認識は科学的根拠をもって裏付けられ、理解されなければならないが、科学の未発達な時代においては、病はその時代の宗教や思想と深く関わり意味付けられてきている。疾病に対する

正しい知識や認識の欠如は常に「病」を特殊化し、患者を異常視し、偏見差別の対象にしてきたのが人類の歴史であったわけである。このような歴史的事実を踏まえてエイズ教育を考える場合、この疾病に関する正しい知識の普及は不可欠な要素の一つになるのである。

エイズ教育の必要性を示す例として、小林昭氏の「在タイ駐在員のエイズに対する意識調査」があげられる[6]。日本企業のタイ進出も目ざましく1991年末には、約2万人の日本人が滞在している。一方、タイでは HIV 感染者の急増が西暦2000年までに400万人になると予想され、南アジアを代表するエイズ多発国として注目されている。感染様式の大半は男女間性行為であり、特に国際的には外国人の売買春が大きな問題となっている。今回の調査は、HIV 感染の危険性の大きいタイ駐在員を対象にエイズに対する意識調査を行ったものである。そのアンケート内容はエイズに関する正しい知識をどの程度もつかを調べるもので、国際社会の中の日本人のエイズに対する認識を知る上で非常に興味深いものである。その内容は、エイズに関する知識として「HIV 感染が異性間交渉で起こること」「同居生活やキスで感染が起こらないこと」「母子感染の可能性は高いこと」「コンドームで感染予防が可能なこと」等の理解度問題である。このアンケート回収率は42％と低く、調査対象者のエイズに対する認識の低さがうかがわれている。さらにその結果から、「HIV 感染が異性間性交渉で起こり」、「コンドームで予防可能である」ことについては80～90％の正解者があったにもかかわらず、「同居生活」や「キスによる感染」のないことについての正解者は50％以下という低値を示している。この結果の意味するものは調査対象者のエイズ感染に対する知識の不正確さである。つまり、回答者の半数以上が「同居生活での感染……」あるいは「キスでの感染……」等の設問に対して誤った回答を出している。このことは必然的に HIV 感染者への偏見差別を生む素因となるのである。

現代社会は「不安の時代」といわれ、私達は数多くの不安を抱いて生活している。20世紀末になって突如として現れてきたエイズも大きな不安の一つである。この不安におののく非感染者は自己防衛行動をとり、患者や感染者に対し

て言われなき差別行為となって現れてくる。また、感染者のもつ不安は自らの死に対する恐怖となり自暴自棄的な自殺行為となって現れてくるのである。この不安に対する解決策はエイズに対する正しい知識をもつことから生まれてくるものと考えられる。

HIV 感染に関する正しい知識は最新医学で確認され、証明されているものでなければならない。表2は、その内容について概略を記載したものである。感染者の発病は平均10年と長く、自分自身が感染者か否かは、この疾病に特有な症状がでるか、あるいは抗体検査を受けない限り判明しない。このような特徴をもつ HIV 感染は、知らず知らずのうちに非感染者へと拡大することになる。エイズ感染拡大の鎖を断ちきるためには自らが自覚してエイズに対する正しい知識をもち、さらにその知識をもとに正しいライフスタイルを確立することである。そしてエイズ蔓延が広がり、HIV 感染者が急増するなかで、非感染者が留意しなければならない点は感染者との日常生活における接し方についての問題である。表3は、その安全面および危険面について具体的にまとめてみた。この内容はエイズ感染者の人権擁護のために極めて重要であり、非感染者がいたずらに恐怖心を抱いたり、感染者に対しての偏見差別を回避するためには必須の知識として身に付けておくべきであろう。

表2　エイズ、HIV 感染症の正しい知識の普及

（1）エイズ発症の原因 エイズは HIV に感染することによる。
（2）HIV 感染経路 HIV は血液を介してヒトからヒトへと感染する。具体的にはこのウイルスは感染者の血液や精液にあり、性行為（男女間または男性間）により感染する。さらに感染女性から胎児、新生児へ胎盤や母乳を介して感染する。その他、HIV 汚染血液、血液製剤による医療過失により感染する。麻薬濫用者による HIV 汚染注射針の共用により感染する。HIV はインフルエンザによる呼吸器感染、蚊や鼠といった昆虫や動物を介した感染はない。
（3）HIV の感染力 HIVの 感染力は、同じ感染様式をもつB型肝炎ウイルス（HBV）に比べはるかに弱い。具体的には HIVの感染力は HBV の10分の1から100分の1である。

表3　患者、感染者との日常的接触による安全性

(1) 感染者の咳やくしゃみを吸い込んでも安全である。
(2) 同じ鍋や皿で食事をしても良い。
(3) 同じコップで水や酒を回し飲みしても良い。
(4) 感染者との握手、あるいは接触した吊革を握っても良い。
(5) 同じ風呂、プールに入っても良い。
(6) トイレを共用しても良い。
(7) 同じ職場、学校で生活を共にしても良い。
(8) 感染者を刺した蚊に刺されても安全である。
(9) 感染者の飼っているペットとじゃれあっても良い。
(10) 感染者が使用したシーツや衣類を一緒に洗濯しても良い。
(11) 軽いキスはしても良い。
(12) 歯ブラシ、ひげ剃りは共用しない。

2）エイズに対する偏見差別の回避

エイズ教育でもう一つの大きな課題は偏見差別の問題である。偏見差別はエイズに限ったことではない。偏見について社会心理学的に定義すれば、「非好意的な態度、つまり、他人や他の集団にとって好意的でない、あるいは不利になるような仕方で、その人々を眺めたり、考えたり、その人に対して行動したり、感じたりする傾向」という捉え方がある。偏見の心理について「偏見の構造」の著者である我妻洋と米山俊直は「人間の内部には（特に無意識には）あとでのべるように、さまざまな欲求が満足されないままに残っており、たえず緊張が存在するのであり、この点が偏見の心理について語る私たちにとって重要なのである。」と述べている[7]。さらに彼らは「自我が未熟な、権威主義的性格に、しばしば認められる、もう一つの特徴は、他人や特定の集団を見下し、その劣等性を軽蔑し、自分の方が優秀なのだという、根拠のない優越感を抱き、これにすがりつくことによって、辛うじて自己内心の弱小感や無力感や劣等感をカバーし、補償しようとする傾向がある。弱く未熟な自我は憎しみのフリ向けに加えて、しばしば他人を軽蔑し、さげすむことを必要とする。これが偏見の心理の第二の側面である。」と指摘している。つまり、偏見は常に社会的に抑圧され、欲求を満たされない、未熟な自我をもつ人間の心理的なはけ口と考

えることもできるのである。

かつて、ライ病やペスト等の疫病流行時において、患者や感染者の強制隔離が感染拡大の防止策として行われていた。しかし、20世紀の今日においてこのような人権を無視した患者に対する取締りや強制隔離は、どれほど疫病の流行の防止に効果を上げてきたかが疑問となっている。つまり非人道的、抑圧的な取締りは、むしろ感染者を地下に潜らせることになる。そして、表面的には感染者数が減少したかのように見えても、実際には数字として管理できない感染者の爆発的な増加につながってくるのである。これはエイズ流行についても同じことが言えると思われる。つまり、偏見差別の対象になった患者に対して取られる処置は、不平不満のはけ口が弱者を抑圧する権力と結び付き、強制隔離や非人道的な取締りとなって現れてきたものと考えられよう。

不治の病エイズの脅威はHIV感染症よりもエイズパニックの方で多くの人々に大きな精神的ダメージを及ぼしている。現実にはエイズをめぐって多くのアクシデントが起こっている。例えば、患者とその家族を村八分にしたり、ひどい場合は焼き討ち、さらには感染者や家族の就職、結婚の拒否、血友病の子供を学校から締め出し、感染者をホモだと決めつけて社会的な市民権を剝奪するといった事件は後を断たないのである。この偏見や差別問題の解決はエイズ教育の重要な柱の一つであり、各国においてもその充実が期待されている。

この章ではエイズ教育の課題について述べてきたが、エイズ多発国の欧米では患者や感染者に対する偏見差別の問題から、より一層の人権教育の重要性が叫ばれている。しかし、現実には、これら偏見差別を引き起こす根は深く、エイズについての正しい知識を身につけることや法律的解決法だけでは不十分である。この問題に対する本質的な解決は、エイズ教育の基本思想のなかに人間同士がお互いに理解し合い思いやるという人間の心の変革を必要としているのである。

（3）性教育の現状

生命科学の領域において、性の分化は自然界が織りなす生命の知恵とも考え

られる不可思議な現象である。例えば、それは植物界では雄しべと雌しべ、動物界では雄と雌へと分化していく。これら分化した雌雄の結合は新たな生命体を作り出し、種の存続、繁栄に役立っている。生物のもつ雌雄の分化機能の進化は種の遺伝子の存続、種繁殖の効率化、さらには種の多様化に重要な役割を演じている[8]。一方、人間に目を向けるならば、大脳化現象の進んだホモ・サピエンス（ヒト）は自らの分化した男女の性を生殖機能（物質）の領域から文化（精神）の領域へ昇華し発達している。しかし、このような人間の性を考える時、今日ほど人間の性が物質視されている時代はないように思える。例えば、先端科学技術の進歩により生殖技術が科学的に解明されている。また、この医学技術の発展によって普及されている先進諸国の人工中絶・授精の増加は、このことを如実に物語っているようにも思える。さらに、今日では新たにエイズと性行動の問題が加わり、快楽の道具と化した人間の「性と生存」の問題が複雑化し、性倫理に対する考え方も混迷化している。いうなれば、STD 流行の増加の程度はその国の性倫理の実際の是非を問うリトマス試験紙ともいえる。今後、性教育の内容の中でも STD 感染防止に関するカリキュラムの比重は日増しに大きくなると考えられる。

1）欧米の性教育

今日のアメリカほど性に解放的で、性産業が盛んな国はないといわれている。そこへエイズの流行が重なり合い、宗教界は神の啓示であるとさえいっている。かつてアメリカでは性に関する伝統的な意識上の抑圧があり、その原因はキリスト教の教義であったといわれている[9]。しかし、アメリカにおいて宗教による性の抑圧は1970年代になって徐々に崩れ出したとみられている。そのひとつが性革命という保守的なキリスト教の性倫理に対する反動として起きてきた性解放運動である。この運動の風潮は性行為を楽しみ、多数の相手と性的接触をもつことは人間の本質から罪悪ではなく、逆に性欲を抑制することは不自然で、不健康であるというものであった。したがって、この考え方は性産業と結び付いてより一層無秩序な性意識を作り上げている。さらにも増して、映像やマス

メディアの発達は青少年の性行動に多大の悪影響を及ぼしたとさえいわれている。テレビやコマーシャルの番組はあらゆる年齢層に向けて性的映像を流し、性は単なる商業主義の商品と成り下がり、性行動は乱れて行ったと考えられるのである。

このように欧米は、エイズ流行の最大の原因を無防備な性行動にあったとし、本来の良識に戻り、性行動の自制や性意識の変革の必要性を強調しだしているのが現状である。また、学校教育はエイズ問題を受けて、性行動の活発な10代の性教育の充実を目指して真剣な取り組みをみせている。この疾病の流行に対する各国の捉え方はまちまちであるが、当然捉え方の相違は、エイズ対策の相違となって現れてきている。この点を踏まえてアメリカとイギリスの性教育[10]について紹介し、さらに日本の現状について触れることにする。

アメリカ合衆国政府（当時、レーガン大統領）は、エイズを男性同性愛者にのみおこる特殊な疾病（奇病）として扱い、流行当初の対策を的確に打たないままに放置し、その流行の拡大を許してしまったと、指摘されている。このようなアメリカはエイズと性教育について緊急の対応に迫られているといっても過言ではない。エイズ患者の多発したアメリカの性教育は学校教育の全課程において内容的にも充実を図っている。例えば、性教育に関わる家庭と学校の役割、親の教育権やプライバシー権、性教育を担う教師の資格と研修、性教育プログラム、節制や純潔教育の見直し等々と実施している内容は多い。しかし、現実には激増する感染者を目の当たりにして焦燥の色が見られている。この国のエイズ・性教育の問題点はコンドーム教育にあるといってもよいだろう。アメリカの性教育は、日本では考えられないほど性交に関する教育の徹底が必要とされており、「コンドームに始まり、コンドームに終る」といった具合いである。コンドーム教育は性行為を具体的に説明せずして実施することはできないのはいうまでもないが、実際には大きな矛盾点をはらんでいる。すなわち、連邦予算を大幅にアップして、エイズ教育や家族計画のための性教育に力を入れても、皮肉なことに未成年者の妊娠を著しく増加させる結果を産んでいる。さらに、これらの性教育を受けた学生は積極的に性行動へ進む傾向がみられ、学生の性

教育に対する未消化現象が問題とされているのである。

一方、イギリスのエイズ対策においては、アメリカに比べ早期に効果的な手が打たれたとして WHO の評価を受けている。この国のエイズに対する基本的な考え方は「無知からエイズで死ぬな」というスローガンに集約される。この考え方は、イギリス特有の合理主義に由来するのみならず、かつてペスト流行で学んだ貴重な体験に基づいていると考えられる。イギリスでは、当初からエイズは同性愛者のみに起こる特殊な疾病ではなく、一般の人々にも感染する可能性のあるものとして、早期に適切な対策を打ち、流行の拡大を最小限度に阻止したといわれている。

イギリスの性教育の特徴は伝統的家族主義に基づき、本人、両親、家族さらには社会との関係性を重視したものである。教育方針は1980年より、ほとんどの中学校と、ほぼ半数の初等学校で行われている。具体的には、初等学校（5才～13才）では、次の2項目に重点が置かれ実施されている。その第一に、性教育は道徳の授業の一貫としている。第二に、正しい用語を用い生命の誕生から、その機能に携わる身体の仕組みについての関連性が重要視され教えられていることである。中等学校（11才～16才）では、人格教育に重点が置かれている。その内容は人格的、社会的教育の一貫として保健教育プログラムの中で生物、家庭科、宗教教育、保健体育などのカリキュラムと関連付けられて行われている。さらに注目すべき点は避妊、人工妊娠、中絶、同性愛、性病について充分に留意点を踏まえ指導するという考え方に基づいて実施されていることである。特に性病についての教育はエイズについて充分な科学的情報を駆使して指導にあたっている。また、同性愛についての教育は欧米では議論の的でもあり慎重な対応をとっている。すなわち、この問題に対する社会の寛容度は高くなりつつあるとはいえ、多くの個人や集団は依然として同性愛を特別視したり、不道徳であるとして差別の対象と見なされているからである。

2）日本の性教育

最後に、日本の性教育の現状について触れたいと思う。わが国の学校教育は

近年まで性に関する問題をタブー視して、積極的に取り扱うことを避けてきている[11]。第二次世界大戦後、性に関する教育は「純潔教育」の名のもとに学校教育の中に位置付けられ模索的に行われただけで、その内容は旧態以前として未消化で、不充分なものである。その歴史をみると、70年代において、欧米の性解放の風潮の余波を受けてテレビ、週刊誌等のマスコミによる不用意な性に関する情報が氾濫し、性道徳は荒廃を強めている。また、青少年の肉体的性的成熟の年少化とあいまって、性的暴力等の諸問題が増大し、社会における性教育についての関心が高まり、性教育という用語が定着しだしている。しかし、全国的に学校教育の教育環境は受験志向に傾き、人間教育の一貫とされる性教育の必要性に対する認識は低かったが、ここ数年のエイズ流行で、ようやく日本においても性教育の充実への機運が高まりを見せている。

日本では性教育を実施する際において、文化的受け皿が問題視されている。すなわち、国民的にも性に対する羞恥心は根強く、また性教育を指導できる教師も少ないのである。現在では、エイズ予防教育で必要とされるコンドーム使用の是非をめぐって教育界は大きな戸惑いを見せている。いずれにしても、今日の日本はエイズ流行によって人間教育のための性教育の実施を迫られているのである。

このような日本の現状に対して心理学者の河合隼雄は、次のように性教育の重要性について述べている[12]。すなわち、彼は「エイズという怪物を相手にしていることを考える限り、ある程度の一括的な『性教育』『エイズ防止策』を許容せざるを得ないかも知れない。しかし、これまで述べてきたように、それは両刃の剣のようなものであり、あくまで、本来的な個としての『性教育』が必要であることを教師も親も認識すべきである。……教育には『教』と『育』の両面があり、性教育についても『育』の面が重要になることを考えると、この答えは得られると思う。『性』について自らの力で、個別的な回答を考え出してゆくような人間を『育てる』こと、もっと言うならば、そのような人が『育つ』土壌を提供することはできる。それが性教育の本質ではなかろうか。『性教育』は人間教育であるが自らの力で育ってゆく過程のなかで性というこ

とが重い役割をもってくるのである。」と述べている。

エイズの流行拡大によって性教育はその重要性が叫ばれ、種々の議論がなされてはいるが実際にはまとまった見解は出されていない。むしろ、教育現場では欧米の性教育に対する批判的な意見も出されている。例えば、日本においてもアメリカのように性交を含めた生理的機能のみを重視し教育を実施していけば、青少年の性行動は欲望に駆られ興味本位に走り、混乱する原因にもなりかねないとする考え方が多く存在するのである。

この章では性教育の現状について述べてきたが、その内容は各国の倫理観や生活信条の相違により異なることも事実である。今後より一層、国際社会の進展により性に関する諸問題は表面化し、その教育の重要性は増すものと思われる。また本来、人間の性行動は「こころ」を基調にしたパートナー同士の相互間の意志の尊重を欠いては成立しないものである。つまり、性教育は人間関係を学ぶという側面をもち、人間形成のための教育でなければならない。性のライフスタイルは個人の習慣や信条を反映しているので一括的な結論は避けなければならないが、少なくとも、その教育の基盤には人間生命の尊厳観を重要視し、自律と責任を育てる人間教育でなければならないのではなかろうか。

（4）欧米にみる性倫理

第二次世界大戦後、欧米諸国で始まった性の自由化、さらにはフリーセックスで代表される性革命の風潮は性行動に変化を生じ、人間の性が単に生殖のみとする考え方では理解できなくなっている。また、近年における生殖医学の進歩は人間の性に関する新しい諸問題を提示している。例えば、アメリカで大きな反響を呼んでいる人工中絶、人工授精等の問題がその一つである。さらに、エイズの出現により、にわかに表面化してきたのが性行動に関する性倫理の問題である。性倫理の基盤となる考え方は宗教に大きく影響されていることはいうまでもない。宗教にとっても「人間の性」は「人間の生死」と共に重要な中心課題である。

この章においては、エイズ多発国である欧米の性倫理をその思想的基盤であ

るキリスト教に焦点をあてて概論した。断わっておくが、著者自身は宗教（こころの問題）とウイルス感染（自然現象）を同次元においてこじつけて問題提起するつもりはない。しかし、人間の性行動と宗教の関係性は「欲望と倫理性」の次元で議論の対象になると考えられる。言い替えるならば、宗教倫理は極めて本能に近い人間の性を規制することができるのだろうかという疑問にぶつかる。キリスト教の性倫理観はこの疑問についての一つの回答例を示しているように思える。

キリスト教は愛と慈しみの宗教とされ、同時に禁欲と自制の宗教とされている[13]。その歴史はキリスト教成立の初期において禁欲イコール性的純潔と考えられ、信仰者の性的禁欲は神への信仰の美徳とされてきている。しかし今日、皮肉なことに STD であるエイズはキリスト教の教義とは裏腹に、欧米で爆発的な流行を許してしまっている。エイズが流行し、性行動の問題が大きく浮上するなかで、特に社会的に焦点があてられているのが感染防止のためのコンドーム使用と同性愛の問題である[14]。エイズ多発国において感染防止策としてコンドームの使用が奨励されているが、その使用の是非をめぐって賛否両論に分かれている。すなわち、この問題にはキリスト教教義の制約が重く伸しかかっているのである。つまり、教義の解釈から性行為の際に用いるコンドームは、性の目的は生殖にあるという基本原理から逸脱するものとされているのである。また、同性愛についても、性は生殖を目的とするという教義に反し、その性行為は神を冒瀆する憎悪の対象となっている。エイズ流行により引き起こされるこれらの諸問題はキリスト教社会に新たな人間の「性と生存」のあり方について問いかけを発しているのであろう。

キリスト教における男女観についての歴史的背景は非常に興味深い。ユダヤ・キリスト教の伝統は、人間が神によって特別につくられ、その他の被造物の世界は人間によって支配されるという思想に基づいている。このことからキリスト教は主と従の対立的側面をもつ思想として解釈されている[15]。この伝統的思想は性の捉え方や、男女の差別観においても強く影響を及ぼされている。例えば、原始から古代にわたるヨーロッパ大陸では、母性社会の繁栄を示す母

神偶像の存在する遺跡が随所に発見されている。また、古代ギリシャ時代の遺跡からも母神と男神を祭る偶像がみつかり、男女対等の社会が形成されていたことを認めている。一方、古代ローマ時代においてキリスト教が発展した古代社会の遺跡からは母神偶像の存在を認める痕跡は消えているといわれている[16]。このことはキリスト教社会が強固な父権制社会であったことを物語っている。つまり、ユダヤ・キリスト教の伝統は女性に対して厳しく、女性は天地創造において二次的産物であり受動的存在であるとされている[17]。さらに教義においても女性はさげすまされていたとする箇所を数多く認めている。例えば、テモテの第一の手紙には、「女は静かにしていて、万事につけ従順に教えを学ぶがよい、女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない。むしろ静かにしているべきである。なぜなら、アダムがさきに造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされ、あやまちを犯した。しかし、女は……子を産むことによって救われるであろう。」と強調されていることからも理解できよう。

キリスト教の性倫理を考える場合、その対象となるべき愛について触れておく必要があると思われる。欧米で用いられている愛の概念は大きく2つに分けられている。その一つは人間的愛を示している。これは対象や目的をもつ自愛であり、自己中心的な愛である。これに対して神の愛（アガペー）は超越的な愛を意味している[18]。欧米における人格的愛はこのアガペーを基調としたものと理解されている。さらに、キリスト教における人間的愛は、アダムとエバが禁を犯して知った性愛的行為を人間の原罪としてとらえているところに特徴をもつのである[17]。そして、その原罪である人間的性愛は神の主権のもとに子孫を残すことによって悔い改められるものとしているのである。

キリスト教の性倫理に対する教義は一次元的な思想として明確に示されている。すなわち、初期教会の教義は中世以降のものに比べ、柔軟性を帯びていたようであるが、その中にこそ一次元的見方の芽がみられている。例えば、フリートリッヒ・トゥルツァスカリクは彼の著作の「カトリシズムの性倫理」の論文[19]のなかで、ヘレニズムのユダヤ人、アレキサンドリアのフィロ（紀元後

40年没）の考え方を用いて、その教義の一次元性を指摘しているが、さほど硬直しているようには思えない。その内容は「夫婦の交渉に対しては異議を唱えないが、夫婦外の交渉、とりわけ時代の性の荒廃に対しては異議を唱える、と繰り返し主張する。夫婦は子供が恵まれることを願って褥を共にすべきである……神は自然の秩序と枠をはずれた性的結合を憎み罰する反面で、子供を産むための男女の自然の結合は祝福している。」として、性は生殖を目的とすることを重視し、性行為にともなう快楽については否定的には言及していない。しかし、性の倫理観は時代が進むにつれて硬直化しているといわざるを得ない。つまり、中世の結婚観は快楽を求める意志のみならず快楽の感情も常に罪であり罪を免れ得ないとして、夫婦の営みは善であるが、それに伴う快楽は悪であるという性の喜びに対する評価を生んでいる。17世紀にはより一層、性倫理的厳粛主義が強まっている。すなわち、性の快楽を自らの意志によって肯定することをすべて大罪とするというものである。これらの性に対する一次元的大罪論は今日でも本質的にかわっていないとしている。例えば、1975年アレキサンダー7世は「キリスト教的伝統と教会の教義によっても、また常識の証言によっても、性の道徳的秩序は人間の生活に対してきわめて大きな価値を持っているので、この秩序に対する直接的違反は明らかに重罪である。」と夫婦における性行為は明らかに生殖を目的にしていると固執しているのである。

次に、キリスト教の同性愛に対する考え方について紹介したい[14]。同性愛に対するキリスト教の教義は厳しく、迫害の歴史を刻んだものといえる。聖書にみる同性愛は、否定的なものとして解釈する文脈を多く認めている。例えば、コリントの信徒への手紙の第6章には「正しくない者が神の国を受け継げないことを知らないのですか。思い違いをしてはいけない。淫らな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者……は決して神の国を受け継ぐことはできません。」と述べられている。ヨーロッパ中世までのキリスト教会（ローマ・カトリック）は古代ローマ・ギリシャ時代の影響が残り、同性愛はあまり罪悪視されていなかったとする記録もあるが、その後、時代が経つにつれて、性に対する教会の方針は厳しくなり17世紀には同性愛は「邪悪な行為」と

見なされ「罪人」として処罰の対象となっているのである。

同性愛に対するカトリック教会の方針は現代においても17世紀とほとんど変わっていない。1960年代になってからもキリスト教社会では同性愛者に対して誘拐や強姦といった犯罪と同じように重罪とする法律が存在している。また、75年のバチカン教皇庁から出された「性倫理の諸問題に関する宣言」は「客観的な道徳的秩序によれば同性愛の関係は、本来あるべき規範を欠いている行為です」として同性愛行為に対して否定的なものである。

エイズ患者に対するキリスト教の対応も中傷的なものである。例えば、保守系の聖職者からは「彼らは地球を滅ぼす者であり、悪魔の意に動かされている者だ。」「エイズこそが神が与えた懲罰なのだ」といった発言がみられる[14]。

一方、60年代から70年代にかけてアメリカ社会におけるゲイ解放運動はフェミニズム運動や公民権運動とならぶ最大の社会運動の一つとみなされ[20]、また、ギャロップ機関の調査でも同性愛関係の合法化に賛成する人が日増しに増加していることを報告している[24]。アメリカ社会は徐々にではあるが同性愛者の市民権を認めつつあるのも現状である。このような人権を基調にした社会状況において聖職者は原理的な解釈によって同性愛者の生存権を剝奪するような発言や行動をとることは許されるべきものであろうか。

人間の性のライフスタイルにおいて、同性愛は世界的にも多くの社会に存在するといわれている。しかし、同性愛がどのような原因で形成されてきたかは現在でも明確ではない。現代医学はその原因について幾つかの考え方を出している[21]。性を研究対象においた医学的研究では、人間は第一次、第二次性徴と進み、身体の性から社会的、あるいは精神的性の形成へと段階的に成熟していくとしている。この過程が何等かの影響により未成熟な性腺を形成すると半陰陽となることも解ってきている。大脳化現象の進んだ人間にとって社会的、精神的な性の形成が極めて重要であるが、解剖学的に一つの性をもちながら、異性として行動するときに性原理が逆転する。すなわち、この現象が性倒錯と呼ばれ、同性愛、異性装、変性などがこれに属する。これらは、心理面や行動面で表れるので性心理学的な問題として考えられている。特に同性愛は外性器の

解剖学的形態が自分と同じ人間に対して愛情行動を示す反応と理解されている。現代では同性愛に対する研究でいろいろな説が出されているが、医学的、遺伝学あるいは心理学的領域でも進み、その原因は胎児期における神経内分泌学的異常説、遺伝学的要因説、あるいは家庭、社会環境依存説等によるのではないかと考えられている。

イギリスの性医学を研究するC．R．オースチンは彼の著書の「ヒューマン・セクシャリティー」の中で次のように述べている[22]。彼は同性愛に関する考え方について「同性愛そのものが精神障害にあたるかどうか、同性愛的なるものにどんな精神病理学的なものがみられるのか、いまだかなり論議があるかもしれない。しかし、現代の科学的な研究では同性愛は精神障害ではないという点で、一致していることを強調しておきたい。……この考え方はジーグモント・フロイドの考え方を反映している。彼は同性愛が正常人と何ら差のない普通の人間にみられ、能力が劣ることはないし、場合によっては高度な知的才能が際立っている人さえいると言っている。また、同性愛は社会にとって有益なものであるとは思われないが、何ら恥ずべきものでもない。何ら罪に値するものでもないし、堕落でもない。したがって病気と分類することはできない」と精神医学的な観点から示している。

今まで、欧米の性倫理について、キリスト教の思想的な背景について触れてきたが、一次元的な性倫理観の問題点は、この宗教のもつ生命観に由来するものと考えられる。キリスト教の生命観は聖書の創世記において、人間とその他の被造物（自然）の創造者は神であることを明示している[23]。それは、生命創造の位階制度が神→キリスト→男→女と順位だてられていることを意味する。つまり、男は神に息を吹き込まれて造られたことから神の代理人として女性や自然を支配するという構図が示されている。男女の性行為は神の世の繁栄を成すが為の手段であり、男は女に子供を生ませる特権意識をもつものと考えられているのである。このような視点から立つと世界中に蔓延するエイズ感染症は父権社会の矛盾をさらけ出したものと考えられよう。

現代における欧米の性倫理はキリスト教の倫理思想以外に精神分析学派のフ

ロイド（1856-1939）やその弟子達による影響も計り知れない。彼らの思想は19世紀の唯物論的自然科学から出発しているものの、精神分析学の領域から人間の性行動を見据えている[24]。そして彼らの研究成果から導き出されたことは、人間の性行動が決して神によって支配されるという超自然的なものではないことを示唆している。

フロイドのいう欲動は本能あるいは本能的衝動と理解されているが、性欲動は後天的にその目標や対象をもつことから、極めて人間的な本能に近いものとし、性的エネルギー（リビドー）と位置付けられている[25]。そして、人間の性欲動が種族維持あるいは個体保存の欲求という生の本能（エロス）として、現実原則によっては支配されにくく、むしろ快感原則によって支配されやすいものとしている。彼の精神心理学は、その欲動に対して対象や目的を認識、自覚させることにより人間的本能から人間的知性への獲得という人間的成長の重要性を示している。さらに、彼は人間社会における性の役割を自らが作り上げた文化の秩序と捉えるという、精神分析学の対象領域として独自の理論を展開している。そして注目に値することは、フロイド学派により積み上げられた学問的成果である人間の性の捉え方を精神医学の領域にとどまることなく一般社会のなかにも根付かせて行ったことである。すなわち、20世紀の欧米においても、人間の性に対して既存の宗教倫理にとらわれず、新たな視点での問い直しが始まったと考えられるのである。

（5）考察

今まで、エイズ流行に関して重要視されているエイズ教育と性倫理の動向について述べてきたが、その流行の原因が性行動の乱れにあることは疑う余地はないと思われる。しかし、欧米にみる性倫理の章でも述べたように、性行動を一次元的に不浄なもの、あるいは罪悪視することは人間の生命の働きをありのままに直視したものとはいえない。人間の性は本来的に生殖と快楽を兼ね備え、また人間相互のスキンシップといった要素をも含んでいる。そして今日、これら人間における性の多次元性の要素はすべて不可欠なものと考えられてきている

ることから、今後、人間の性とその性倫理の諸問題は新たに生命倫理という視点からも再検討の必要性に迫られている。

生命倫理学が日本に定着しだしてから10年以上の経過をみることができるが、この学問領域は発展する生命科学や医療技術によって提起される医の倫理についての諸問題を道徳的な価値観や原則に照らし合わせて論じる体系的な学問として発展してきた[26]。特に性の諸問題はエイズ流行の拡大により患者の人権擁護の問題とともに重要視され、欧米では生命倫理学の研究対象の一つとされている。この人間の性に関する諸問題は現代科学の発達によって、次々と解明され、その機能や諸現象は脳の構造や機能を離れて説明することはできないところまできている。さらに、性分化と機能、性行動、性の役割といったテーマは無意識層とも深く関係するので、精神心理学の領域でも論じられるに到っている。すなわち、人間の性を対象とした学問領域は、単に自然科学に限定されるものではなく、総合的な人間学の領域として発展してきているといえよう。

そこで、新たな視点での展開を試みるために、現代科学で理解され得ている性の捉え方を整理してみたい。性という意味は、医学あるいは生物学的に形態や機能、性行動や性の役割など広い意味合いをもっている。性の基本は生殖と考えられているが、現代においてはかならずしも限定できない[27]。日本語における性は「さが」を意味しているが、その他に①生まれつき、性質、②男女、オスメス（心とからだの上の）の区別、③「性」に基づいて起こる特別の働き、と広い意味を含んでいる。当然この言葉は英語の sex と対応されている。sex は２つに分かれたうちの片方、それぞれの男性と女性を指している。最近では sex という言葉の代わりに社会学的意味を付加したジェンダーという言葉も使われている。セシル・ヘルマンはこの言葉を用い、その内容を大きく４つに分類している[28]。それは、①遺伝的：染色体Ｘ，Ｙで決まる遺伝型に基づく性 ②身体的：身体の外観、特に第二次性徴に基づく男女の身体つきの差 ③心理的：個人の独自の自己認識や行動に基づく性 ④社会的：①②③より広い文化的な男と女というカテゴリーに基づく性で、それによって個人は社会的に男あるいは女として認められる、としている。札幌医科大学の熊本悦明は、性につ

いての捉え方を生態学的な考え方を導入して、生殖と性的快楽の享受という要素のほかに、男女の最小単位の群形成本能としてのスキンシップという要素を含めている[29]。

人間の性は生殖や快楽、スキンシップといった要素ばかりでなく文化をも含めた広い意味を包含しているが、その性機能を操るのは脳であることはいうまでもない。性の分化機能は現代科学の発達により着実に解明されてきている。性分化には脳、視床下部が関与し、メスあるいはオスのそれぞれの性機能が発現される[21]。メスとオス性機能の差は、メスの卵巣機能が周期性をもつにもかかわらず、オスの精巣機能は周期性をもたないという特徴をもつ。人間の男女の性機能も生理学的側面において他の哺乳動物とかわらない。その性機能は外界の刺激を五感（視覚、臭覚、味覚、聴覚、触覚）により受けて、さらに神経系や内分泌系を介して大脳（新皮質）に伝えられ活性化される。大脳は性中枢である大脳辺縁系に指令を出して発情を促進したり、抑制したりしている。また、性本能を操る情動脳（辺縁系）は思考や情操を司る大脳と連結しており、相互にコントロールすることが可能にできている。このことは動物の性行動との差違を論ずる上で重要であると考えられる。何故なら、動物のそれが本能行動といわれるように、性周期を基本としたステレオタイプ（刺激により誘発されるパターン行動）の行動であるのに対し、人間の場合、大脳との相互作用が極めて強いので、より複雑になっている。つまり、時を選ばず性行動を可能にすることもできれば、思考や情操をも充分に考慮することもできるわけである。

以上のような現代科学の成果から、大脳化現象の進んだ人間の性は動物的本能とは異なり、また超越的な神によって支配されるといったものではなく、人間自らの意志によってコントロールできるものと考えるべきであろう。

一方、仏教の視座でみた性の捉え方は縁起観のなかにみられ、生命の法則の一つとしてみることができる。それは人間と自然が共存し、互いに影響し合う存在であるのと同じように、人間の性行動も自然のなかに織りなす生命の営みの一つであり、種族保存の法則と解釈されている。また、性の対象となる愛に関する捉え方は、人間が生きることの根源であるエネルギーとして、愛着のな

かに見い出している。すなわち、愛は人間生命に潜む貧（むさぼり）であり渇愛である。そしてこの渇愛が人間の人生における究極的な苦悩の原因と捉えているのである。故に、性愛に関する仏教の考え方はキリスト教と異なり善悪という対立概念で捉えるのではなく、人間の根本的な煩悩として自分自身の心の問題として捉えているのである。

また、九識論では、人間の究極的な苦悩の根源となる煩悩は六識（意識）と七識（末那識）に見い出している。つまり、愛（煩悩）は深層心理学的に考える自我の領域である七識に座し、創造性の源である理性や知性、あるいは憎の感情や破壊、殺害の心と同居している。そして、この七識は自己の根源的な存在である八識（阿頼耶識）の変化によって変動しやすいものと考えられている[30]。すなわち、煩悩の一つである愛は無意識層以上の深い次元と結び付き、慈悲とも欲望の虜ともなり得る生命状態として内在しているのである。

さらに、「大智度論」（巻72）の「愛とは貪欲煩悩の心なり、行ずべからず、当に慈愛の心を行ずべし」の一節は、人間の愛を煩悩即菩提の原理から捉えるべきものとして重要な示唆を与えている。つまり、この原理から捉え直していくならば、人間の性は決して忌み嫌い、排除すべき対象ではないと考えられるのである。そして新なる性の捉え方として、性の尊厳性に立脚することこそが人間生命の尊厳性を見い出し得るといえるのではなかろうか。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、御指導を頂きました東洋哲学研究所の川田洋一所長、創聖健康保健組合診療所の大谷育夫所長、さらに生命倫理プロジェクトチームの木暮信一、於保哲外、屋嘉比康治、稲光礼子、安倍英一郎、石川てる代、小島明子諸先生方に深謝致します。

参考文献

1）産経新聞、1993年４月２日（夕刊）。
2）朝日新聞、1993年３月18日（朝刊）。
3）「技術と人間」編集部「各国にみるエイズ立法化の動き」『エイズと人権』、東大ＰＲＣ企画（1988）。
4）中嶋宏「ＷＨＯのエイズ対策」『からだの科学』臨時増刊エイズ戦略、日本評論

社（1989）。
5）平波恵美子「病気と偏見ー病マケについて」『メディカル・ヒューマニティー』第3号（1986）。
6）小林昭「在タイ駐在員のエイズに対する意識調査」『医学のあゆみ』第165巻、915～916（1993）。
7）我妻洋、米山俊直『偏見の構造、日本人の人種観』、ＮＨＫブックス（1967）。
8）長谷川真理子『オスとメス、性の不思議』、講談社（1993）。
9）我妻洋『性の実験、変動するアメリカ文化』、文芸春秋（1980）。
10）高橋史朗「欧米の性教育」『現代のエスプリ』特集号、性と生命の教育、第309号（1993）。
11）朝山新一『性教育』、中央公論社（1967）。
12）河合隼雄「性教育とその難しさ」、『世界』７月号（1993）。
13）バーン・ブーロー、ボテ・ボーロー『売春の社会史、古代オリエントから現代まで』、筑摩書房（1991）。
14）生駒孝彰『アメリカ合「宗」国の悲劇』、情報センター出版局（1991）。
15）村上陽一郎「自然と人間の関係について」『メディカル・ヒューマニティー』第６巻、76～80（1992）。
16）市川茂孝『母権と父権の文化史、母信仰から代理母まで』、農山漁村文化協会（1993）。
17）ジャック・リユフイエ『性と死』、国文社（1990）。
18）山崎正一、市川浩編『現代哲学事典』、講談社（1970）。
19）M. クレッカー、U. トウボルシュカ編『諸宗教の倫理学、第１巻、性の倫理』、九州大学出版会（1992）。
20）美馬達哉「同性愛とアメリカ精神医学」『メディカル・ヒューマニティー』第４巻、98～99（1989）。
21）大島清『ヒトはなぜヒトを愛するのか』、ＰＨＰ研究所（1987）。
22）Ｃ．Ｒ．オースチン『ヒューマン・セクシュアリティー』、東京図書（1987）。
23）ヨアヒム・カール『キリスト教の悲劇』、法政大学出版局（1979）。
24）鈴木晶『フロイト以後』、講談社（1992）。
25）牧康夫『フロイトの方法』、岩波書店（1977）。
26）加茂直樹『生命倫理と現代社会』、世界思想社（1991）。
27）近藤四郎、大島清『人間の生と性』、岩波書店（1982）。
28）村岡潔「ジェンダーと生殖」『メディカル・ヒューマニティー』第５巻、92～93（1990）。
29）熊本悦明「現代における性の捉えられ方」『こころの科学』第25巻、22～27（1989）。
30）川田洋一『生命哲学入門』、第三文明社（1973）。

（り　ぶんしょう・委嘱研究員、富士レビオ株式会社主任研究員）